

＜株式会社エフエム東京 第 489 回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和 4 年 6 月 6 日（月）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 11 階 JET STREAM 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（4 名）

ロバート キャンベル 委員長	佐々木 俊尚 委員
松田 紀子 委員	山口 真由 委員

◇欠席委員（2 名）

秋 元 康 委員	川上 未映子 委員
----------	-----------

◇社側出席者（7 名）

唐 島 代表取締役会長
小 川 取締役
内 藤 執行役員編成制作局長
延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長
若 杉 編成制作局制作部長
原 田 編成制作局 報道・情報センター部長

◇社側欠席者（1 名）

黒 坂 代表取締役社長

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約 30 分）
＜沖縄本土復帰 50 年特別番組 FM沖縄・TOKYO FM 共同制作＞
『血や怒り悲しみでもなく人を抱く色として咲けハイビスカスよ』
2022 年 5 月 15 日（日）19：00～19：55 放送のダイジェスト

＜議事内容＞

議題 1:最近の活動について

■2022 年 4 月度 聴取率調査結果

2022 年 4 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果を報告します（調査期間：2022 年 4 月 18 日～24 日）。

今回は、以下 3 区分において、単独トップを獲得しました。

- ・ 男女 18～49 才（コアターゲット）
- ・ 男女 12～59 才
- ・ 男女 12～69 才 ※昨年 10 月に続き、調査開始以来 2 回目の単独トップ

今回の聴取率上昇の要因は、【男女 20 代】【男女 30 代】【男女 40 代】【M1F1（男女 20-34 才）】【M2F2（男女 35-49 才）】の各年代区分で首位を獲得できたことに加え、特にラジオ聴取のボリューム層である【男性 40 代】【男性 50 代】区分が前回比で倍増に近い大幅なスコア上昇をみせ、全体の聴取率を牽引する結果につながったことにあります。また、曜日別でも、平日・土日ともに好調に推移しており、とりわけ放送時間帯のシェアが大きい「平日デイトム」では、朝の『ONE MORNING』から夕方『Skyrocket Company』等含む計 10 ワイド番組で、コアターゲット【男女 18～49 才】の同時間帯在京トップを獲得しました。これは、各番組の境目でのリスナー流出を防ぐため、各ワイド番組のパーソナリティがエンディングで後続番組のパーソナリティと行っている「クロストーク」の様子を SNS で動画中継する等、番組間のリレーを強化する施策を行ったことが功を奏し、朝から夕方まで継続聴取の流れを作ることができたものと考えています。結果、リーチ上昇のみならず、課題としていた聴取分数も全体的に伸ばすことができました。

次回、6 月度調査に向け、この好調を維持するべく検証を重ねることは勿論のこと、首都圏の生活者に寄り添う番組演出、社会的関心事の取り上げ、FM ならではの新旧織り交ぜた多彩な選曲にも磨きをかけて、リスナーからさらなる支持を得られる番組編成に努めてまいります。

■TOKYO FM 制作『村上 RADIO 特別版 戦争をやめさせるための音楽』

第 59 回ギャラクシー賞 ラジオ部門 優秀賞を受賞

TOKYO FM をはじめとする JFN38 局ネットで 2022 年 3 月 18 日（金）23 時 00 分～23 時 55 分に放送した、作家・村上春樹がディスクジョッキーをつとめる番組『村上 RADIO 特別版 戦争をやめさせるための音楽』が、「第 59 回ギャラクシー賞 ラジオ部門」において優秀賞を受賞しました。

審査講評

今年 2 月 24 日に始まったロシアのウクライナ侵攻を受け、作家の村上春樹さんは、急遽、反戦や命の大切さを伝える音楽で戦争の停止と平和を呼びかけようと特番を企画、3 月 18 日に放送しました。村上さんは自ら所蔵するレコード・CD のなかから選んだ楽曲を、歌詞の意味や当時の社会情勢とともに紹介し、若者に命の大切さを伝えるとともに、「年寄りが勝手に始めた戦争で若い人が命を落とすというのは、本当に悲しむべきことだ」と反戦の想いを語りました。

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○最近、ラジオ聴取率調査の結果が WEB メディアの記事など話題になっている。長らく首位を獲得してきた AM 局の凋落というような切り口で。今回 TOKYO FM が首位を獲得してきているというのは、新しい、若いリスナーがしっかり流入していると捉えていいのか。

■TOKYO FM は長らく F1・M1 (20 歳～34 歳) をメインターゲットにしてきたことも影響があるかもしれないが、加えて『SCHOOL OF LOCK!』という 10 代向けの番組を放送していて、今 16 年目になるが、そこで聴き始めて歳をとってからも他の番組を聴いてくれているという流れがある。中高生向けの番組を放送している局はあまり多くないので、その影響はあると思う。

議題 2 : 番組試聴

【番組名】

<沖縄本土復帰 50 年特別番組 FM沖縄・TOKYO FM 共同制作>

『血や怒り悲しみでもなく人を抱く色として咲けハイビスカスよ』

2022 年 5 月 15 日 (日) 19:00~19:55 放送のダイジェスト

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、5 月 15 日 (日) に放送した<沖縄本土復帰 50 年特別番組・TOKYO FM 共同制作>『血や怒り悲しみでもなく人を抱く色として咲けハイビスカスよ』のダイジェストです。

2022 年 5 月 15 日に、沖縄が本土復帰 50 年を迎えました TOKYO FM では FM 沖縄と共同で、復帰後 50 年に渡る沖縄の姿を、歌に詠まれた言葉を通じて考える特別番組を制作しました。沖縄出身のアーティスト・普天間かおりが、87 歳の沖縄出身の歌人・平山良明や、沖縄で短歌研究と創作を続ける名桜大学の屋良健一郎と歌人・佐藤モニカ夫妻から話を伺いました。番組タイトル『血や怒り悲しみでもなく人を抱く色として咲けハイビスカスよ』は屋良健一郎が詠んだ短歌を引用。

普天間かおりは番組によせて、「何が起ころうとも、決して太陽の魂を売らなかった沖縄の声をお聞きください。」とメッセージ。沖縄県国頭郡今帰仁村生まれの 87 才の歌人・平山良明は、日本で唯一の地上戦が行われた沖縄から第二次世界大戦を振り返り、沖縄で短歌研究と創作を続ける名桜大学の屋良健一郎と歌人・佐藤モニカ夫妻は、本土に復帰してから 50 年、その節々の想いを表現した短歌を解説しました。

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○5月15日は新聞やテレビ、様々なところで沖縄特集が組まれていたが、私が見たり読んだりしたものの中で、「聴きやすい」という表現が適切かは分からないが、この番組が一番聴きやすいと感じた。左派的なイデオロギーを強く押し出した報道番組は聴かなければならないという義務感を強いている気がして、それはそれでももちろん大切なことだが、何か糾弾されているような感覚になる。それに対して短歌が切り口というのは、ラジオの良いところだと思う。いくつも解釈があって、余韻があって、想像力があって、何かを押し付けるではなく、自分が手を伸ばして取りに行くような印象を受けた。

○87歳と38歳と、2人の違う世代の沖縄の歌人が出ていて、38歳の方が東京で暮らしてみてもこう思ったというアイデンティティに等身大に共鳴することができて、それを経て上の世代の方の言葉が素直に聴けた。街頭インタビューの市井の方の声も、それぞれの言葉や肌感覚で伝わってきて、大変良質な番組だと思った。

○38歳の方のコメントが非常に素晴らしいなど。太平洋戦争や沖縄についてはこう語らないと、という圧力があって、例えば今の時代、テレビや新聞で特攻隊員を賛美するようなことは絶対にできない。必ず、彼らは戦争に反対だけど死んでいった、みたいなことを言わなきゃいけない。でも実際にそうだったかという、全員そうではない。大正時代生まれの戦中時代、実際に戦争に行った世代が戦後に何を語っていたかということを読んだことがあるが、この戦中世代は必ずしも戦争反対という気持ちではなく、自分たちは正しいと信じて戦争に行っていたと。ところが、帰ってきてみたら、何故か自分たちがまるでひどいことをしたかのように語られていて、身の置きどころがなくなっていたと。こういう何とも言えない気持ちで戦後を過ごした元日本兵がたくさんいたという話がある。そしてそれは常に平和報道から抜け落ちている。沖縄の問題も同じで、大学の先生のコメントにあった、ハイビスカスの赤い花という、沖縄戦と血とイメージを結び付けないと、という圧力があって、辺野古や普天間も必ず「こう語るべき」が存在している。沖縄は決定的な弱者であり、本土から見捨てられた、という固定の視点が必ず存在している。「オール沖縄」という政治共同体があり、「オール沖縄」が言っていること以外は言ってはいけない、という縛りが存在する。実際はそうじゃない意見もあるし、本当に沖縄の人がリアルに今何を考えているのかということをしつづつ語っていかないと、沖縄の問題が本土の人には理解できなかつたり、沖縄の若い人に継承されないのではと思う。まだ沖縄の本土復帰から50年。戦争が終わって77年。昨年終戦記念日の平和報道を見ていると、未だに戦争に行った人の話を聴いている。もう100歳を越えている人たち。きつともう記憶も改竄されているかもしれない。その証言をつなぐことは、果たして若い人たちの心に刺さるのかと。そうい

う中で、かつて起きた悲惨な出来事を次世代に継承していく、当事者の証言以外の方法を模索していく必要があるなど。そういう意味でもこの番組のラジオで短歌を軸にするという取り組みは画期的で新しいと感じた。

○長崎県出身なので、原爆の話を通い頃から学校教育で聴いて育った。平和教育とって原爆投下された8月9日は全員登校し、原爆映像を繰り返す見る日だった。投下された時刻には必ずサイレンが鳴る。広島の人もそうだと思うが、長崎の人はトラウマになるほどの教育を受けて育つ。そしてそれは当然、日本全国で同じだと思っていれば、東京に来たら誰も知らなかった。沖縄のことも同じで、ずっと語り継がないと途絶えてしまうので、言い続けていくことは大切で、番組で発信することは大変意義のあることだと思う。ただ、ほとんどの人はあまり興味が無いと思うので、どの時間帯でどういふ切り口で放送するのは重要なことかと思う。

○太平洋戦争のことを描いた『この世界の片隅に』というコミックがある。戦時中に、主人公のすずさんの目線ですべて暮らしている人々の日常・生活を描いた漫画で、非常にヒットした。そこから派生した、『＃あちこちのすずさん』という企画があり、SNSで戦争中の体験をシェアし番組で紹介するというものだった。戦争の激しい体験、例えば焼夷弾が落ちてきた、とか、防空壕がこうだったとか、そういうものではなく、「戦争中貧しかったから、こういう料理を一生懸命作っていました」という生活の側面に当てた話を、当時子どもだった人たちがおじいちゃんおばあちゃんになって、生活の側面から戦時中のことを語った番組。そのことが逆にリアルに、より身近に感じられた。それも踏まえると今回、短歌という切り口はとても画期的で良かったと思う。もう少し欲を言うなら、専門家の短歌の紹介だけでなく、市井の人のことが伝わるような工夫が欲しかった。

○平山氏の声が聴き取りにくかったのが残念。何を言っているのか聴き取れないところが何箇所もあり、聴き取れないものを聴き続けるのは苦痛だなと感じた。聴いている人がチャンネルを変えてしまうのでは。

■平山先生の音声は編集中に聴いて、確かに分かりにくいな、と思ったのは事実。逆にそのことが、「このおじいちゃんは何を言っているんだろう」と前のめりに聴いてもらえるかなと思いつながら作ったという経緯があった。

■今回の制作にあたっては、基地問題などの大きな話ではなく、個人の話、個人の言葉に沿ったもので50年を表現しようと模索して制作した番組だった。たくさんのご意見をいただき、今後の参考としたい。

<第 489 回放送番組審議会 議事録>

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

6月25日(土) 5:55~6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>